

FW-06 SERIES  
ASTON MARTIN RACING DBR9  
Le Mans 2006

FW-06シリーズは、センターシャフトドライブ4WDに、2速A/Tを装備する1/10スケールのRCカーである。完成済みシャシーには複数のボディタイプ（塗装・カット・デカール貼り済み）を用意。さらに送信機や燃料ポンプなどをコンプリート（乾電池は別売）でセットした『レディセット』（45,150円・税込）を販売している。○問い合わせ先：046-229-4115（受付時間10:00～18:00土日祝は除く） <http://www.kyosho.com>



実車ながら…というのは、RCには適さない表現だ。その「スピード感」たるや、実車を遥かに超えたものなのだから。その迫力はまさにモータースポーツそのものである。



## ahead 1/10 RC Motorsports vol.2

# 競う現場の熱さ。高揚。

夕闇迫るサーキット。そこに複数台のレーシングカーが集まってくる。入念な整備が施され、個々のパーツがコンマ・数ミリ単位で調整を受ける。ガソリンを注入され、スターターが引かれるとともに、マシンは咆哮を上げた。かすかな身震いを伴いながら、マシンはドライバーのスタート指示を待っている。「戦いたい」。…マシンとドライバーの意思がシンクロした瞬間、レースは始まった。

モータースポーツとしてのRCを見つめる全6回連載の第2回。  
aheadはレースの現場に足を運んで、緊張と陶酔の世界に目を見張った。

文・世良耕太 写真・高島秀吉 構成・桜間 潤

複数のマシンが一斉に奏でる低いアイドリング音が反響しあい、スタート前に特有の緊張感がサーキットに充満する。レースの始まりを告げる合図。と同時に一瞬の静寂を感じるのは、その直後に耳に届くエンジンサウンドがあまりにも大きいから。アイドリング音を静寂に感じさせるほど、一団が一斉にエンジン回転を上げたときに生み出すエネルギーは巨大だ。

ボディサイド部から吐き出した白煙をスタート／フィニッシュラインに漂わせ、一団は右旋回の1コーナーを目指して猛ダッシュする。先頭は『アストンマーチンレーシング DBR9』。2006年のル・マン24時間レースに出場し、総合6位、GT1クラス2位の成績を残したマシンだ。カーナンバーの「007」はもちろん、歴代アストンがボンドカーに起用されたことと無縁ではない。

マン24時間レースではGT2クラスの常連である。追い掛けるのは『ボルシェ911GT3 RSR』。911をベースにレーシングをぎりぎりまで遅らせた『DBR9』は、極限まで低められたノーズ先端を路面のアンジュレーションに合わせ、小刻みに震わせつつ、赤白に塗り分けられた縁石にタイヤを乗せた。一方、トップの座を奪おうと狙いを定めた『GT3 RSR』は、テールをスライドさせつつアウトに膨らむと、ノーズの先を『DBR9』よりも早く、コーナー出口に向ける。

「ガツン」と衝撃音がしたのも一瞬、高まるエンジン音が起きたばかりのハブニングのことなど、すくにかき消してしまふ。先頭を守った『DBR9』はその後、攻撃の機会を相手に与えないよう、コーナーのイン側を死守するライン取りに徹した。追い掛ける『GT3 RSR』は接触による体勢の乱れに動揺する素振りを見せず、相変わらず車体を左右に振って揺さぶりをかけ、追い越しのタイミングを待った。

レースには必ず、均衡の破れる瞬間が生まれるものである。左／右の素早い切り返しを要求されるS字コーナーで、スロットルとステアリング操作のリズムを乱した『DBR9』が、イン側に不本意なスペースを作り出した。そのわずかな隙を逃さず、『GT3 RSR』が切り込んでトップの座を奪うことに成功。揺さぶり走法から一転、スロー・イン／ファースト・アウトの鉄則を忠実に守る走り、相手の反撃を封じ、フィニッシュした。

RC専用サーキットの一角に設けられた観客席から手に汗握る攻防を眺めていると、サーキットでリアルなレースを眺めているのと同じ感覚に包まれる。理由は実車ながらの車両挙動。迫力あるエンジンサウンドが、興奮の度合いを増幅させる。そして何より、速さを極限まで突き詰めていく行為が生み出す独特の緊張感――。

「戦いたい」。



封印していた情熱を解き放つことのできる世界は、意外な身近にある。

